

## 名古屋大学構内の水田におけるマルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1860) の確認事例

野呂 達哉<sup>(1)</sup> 川瀬 基弘<sup>(2)</sup>

<sup>(1)</sup> なごや生物多様性センター 〒468-0066 名古屋市天白区元八事五丁目230番地

<sup>(2)</sup> 愛知みずほ大学人間科学部 〒467-0867 愛知県名古屋市瑞穂区春敲町2-13

### *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1860) found in a paddy field in Nagoya University

Tatsuya NORO<sup>(1)</sup> Motohiro KAWASE<sup>(2)</sup>

<sup>(1)</sup> Nagoya Biodiversity Center, 5-230 Motoyagoto, Tempaku-ku, Nagoya 468-0066, Japan.

<sup>(2)</sup> Department of Human Science, Aichi Mizuho College, 2-13 Shunko-cho, Mizuho-ku, Nagoya, Aichi 467-0867, Japan

Correspondence:

Tatsuya NORO E-mail: shrew-mole@ace.ocn.ne.jp

#### 採集記録

マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1860) は、酒井 (2002) による1990年頃の守山区志段味地区での記録を最後に名古屋市内からは長らく確認されていなかった。すでに市内からは絶滅した可能性が高いと考えられていたが、2013年になって中川区の水路で再発見された (川瀬・石黒, 2015)。しかし、これ以降、市内の他の地域からはまったく報告がなかった。

2016年6月26日、著者の一人の野呂が、子供と昆虫採集のために名古屋市千種区東山元町6丁目にある名古屋大学構内の水田 (N 35°09'15.5", E 136°58'20.6") を訪れたところ、水田の水底に数個体のタニシ類が潜んでいるのを発見した。このタニシ類を手にとって観察したところ、市内に多産するヒメタニシ *Sinotaia quadrata historica* とは明らかに殻の形状が異なっていたため、標本として持ち帰った。その後、なごや生物多様性センターの標本として仮収蔵し、後日、著者の一人である川瀬が確認したところ、マルタニシと同定された (図1)。

今回の確認場所である名古屋大学の構内には、農学部の研究用として水田が整備されている (図2)。この水田はコンクリートの三面張り水路 (図3) で囲われているが、側壁の高さは20 cm程度と低く、小規模なものである。さらに水路の水底には植物が繁茂し、蛙は土壤で



図1. 名古屋大学構内の水田 (名古屋市千種区東山元町6丁目) で採集したマルタニシ。

形成されているため、水田に生息する生物にとっては比較的良好な環境が保たれている。現在でもアマガエル *Hyla japonica* やトノサマガエル *Pelophylax nigromaculatus* といった水田環境を選好する種が生息している (野呂, 未発表)。元々、名古屋大学の構内は、市内東部丘陵に広がる緑地と繋がっていたことから、現在でも一部に樹林地や湧水湿地を残しており、ヒメボタル *Luciola parvula* やヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* といった移動性に乏しい残存的な種が生息している (松田ほか, 2010; 野呂, 未発表)。名古屋大学の周辺は都市化が進行し、すでに



図2. マルタニシが確認された水田と周辺の環境.



図3. 水田を囲うコンクリートの三面張り水路.

水田環境は皆無であるが、1920年代の地図（国土地理院1/25000「名古屋南部」大正9年測図・大正12年12月28日発行）の地図記号を確認すると、現在の水田の西におよそ150 m離れた地点から鏡ヶ池までは、「乾田」の記号が、また、東におよそ500 m離れた現在の東山動物園の上池周辺には「水田」の記号が表記されている。その他、かつての生物相が垣間見られる記述も残されている。高嶺（1967）によると、昭和17年頃、現在の農学部東南には清水の小池があって、小型のサンショウウオやカワバタモロコ、コモウセンゴケ、イシモチソウ、タヌキモ、ヒカゲノカヅラが見られたという。この小池は、現在の水田の東側にあったと推測され、この場所には今でも湧水湿地が残っている。このように、かつて周辺地域には乾田や水田があり、現在の水田のあたりには池や湿地が存在していたとすれば、構内の水田とその周辺には隔離される以前から生息していた種が生き残っている可能性もあり得る。今回確認されたマルタニシについても当時からの残存個体群である可能性は十分に考えられる。しかし、一方で、過去に水田の泥等が他地域から運ばれてくるような事があったとすれば、今回のマルタニシも、その時にやって来た移入個体群である可能性が生じる。今後、この水田の由来や採集したマルタニシのDNAなど、詳細を調べる必要があるだろう。

マルタニシは宅地開発による水田・水路の減少や圃場整備によって生息環境自体が激減したと考えられることから、名古屋市レッドリストで絶滅危惧 I A 類に選定されている（木村, 2004；川瀬, 2015）。今回、千種

区の名古屋大学構内の水田で新たに確認されたマルタニシの個体群は、再発見された中川区の生息地とは隔離された地域にあり、貴重な個体群であるのかもしれない。

#### 引用文献

- 川瀬基弘. 2015. マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1869). 名古屋市絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2015—動物編一, pp.392. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
- 川瀬基弘・石黒鎌三. 2015. 名古屋市内で再発見されたマルタニシ. なごやの生物多様性, 2: 33-34.
- 木村昭一. 2004. マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1869). 名古屋市動植物実態調査検討会（監修）. 名古屋市絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004—動物編一, pp.272. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室, 名古屋.
- 松田 学・大場由美子・小西哲郎・大場裕一. 2010. 名古屋大学構内におけるヒメボタル幼虫の分布調査. 名古屋大学博物館報告, No. 26: 153-163.
- 酒井 類. 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, 28: 15-17.
- 高嶺 昇. 1967. 開学当時の思い出. 名古屋大学理学部25年小史編集委員会（編）. 名古屋大学理学部二十五年小史, pp.97-98. 名古屋大学理学部, 名古屋.